

本日の学び テーマ:「魚の腹の中で」 テキスト:ヨナ書2章1-11節

【理解の手がかりとして】

ヨナ書 2 章は海に投げ込まれたヨナが奇跡的に救出される内容である。以下に、その内容を詳述する。

1. 導入 (2 節-3 節)

船長に神を呼べと求められて (1:6) 従わなかったヨナが、はじめて神に向かって祈る (叫ぶ)。そしてそれに神が応えになる。「陰府」(2:3) とは死者の行く世界。そこでは神との関係が一切断たれると考えられていた。「わたしの魂は苦難を味わい尽くし、命は陰府にのぞんでいます。・・・あなたはこのような者に心を留められません。彼らは御手から切り離されています。あなたは地の底の穴にわたしを置かれます。影に閉ざされた所、暗闇の地に」(詩編 88:4-13)。

2. 危機の描写 (4 節-7 節 a)

大海に沈んで溺死の危機に陥った者の経験の描写。「波」「深淵」「大水」「地の底」など、その危機の深刻さを表している。「あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて、深淵は深淵に呼ばわり、砕け散るあなたの波はわたしを越えて行く」(詩編 42:8)。「わたしは深い沼にはまり込み、足がかりもありません。大水の深い底にまで沈み、奔流がわたしを押し流します」(詩編 69:3)。

「生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうか」(2:5) とあるが、神との関係が断たれた今、礼拝 (神殿詣) も不可能との認識である。

3. 神への訴え・神の救済 (7 節 b-8 節)、讃美・誓い (9 節-10 節)

一転して、危機からの救出。地の底であろうとヨナの祈りは神に届く。ヨナと神との関係は決して断たれてはいなかった。前段とは真逆に「わたしの祈りがあなたに届き、聖なる神殿に達した」(2:8) とあるように。

「救いは、主にこそある」(2:10) ——これが危機に直面したヨナに、闇に光が射し込んだ信仰告白である。この 10 節には「感謝の声」「いけにえ」「誓い」といった礼拝においてささげられる讃美・奉献・応答の要素が表されている。1 章末においてはそれは他の船乗り達の行為であったが (1:16)、ヨナは今ようやくその心境に達した。

最終節にて、主は魚に命じ、ヨナを陸に吐き出す。「陸地」(2:11) とは天地創造において大水と分離された所である。——「神は言われた。『天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。』 そのようになった。神は乾いた所を陸と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた」(創世記 1:9-10)。「海」(不安) と「陸」(平安) のコントラストである。

ここからは、大串元亮（おおぐし・もとすけ）著の『旧約の祈り・新約の祈り』より、「ヨナの祈り」に関する考察から学んだことを以下に列挙する。

- ヨナの祈りは、旧約聖書の中でも代表的な祈りの一つ。深い苦しみの中に陥り、のたうちまわり、そして最後に神に向かって叫び、遂に感謝と讃美に至った人物ヨナ、その人の祈り。そしてこのヨナは私たち人間の代表者なのである。
- 聖書の中で、海や大水は人生の不安のシンボル。この世の中は非常に不確か。いつ危険が襲ってくるか分からない。昔も今も、周りには「海」「大水」としか言えないほどの不安、危険が満ち満ちている。まさに悩みの中としか言いようのない人生と現実を、（この祈りは）言い表している。大魚の腹の中にいるという表現は、私たちの現実そのものを言っている。
- 魚の腹の中、出口のない暗黒の世界に落ち込んだ時、人はどうするか。そこで直ぐに悟りを開けるかというところではない。現実には先ずそこでのたうちまわる。七転八倒するのである。
- ヨナはそんな七転八倒のあげく、最後に、遂に祈る。ヨナの中に大きな変化と転換が起こった。真暗闇の中でヨナは神と出会い、祈りが聞かれたと確信した。その時に、彼の心の中に明るい光が射し込んできた。彼は、神は苦しむ者と共におられ、心の苦しみから解放し、深い平安を与えて下さることを知った。
- 苦しい時にはいろんな偶像に走る者がいる。神に祈らないで、あれやこれやと偶像を求めて走り回る。しかし彼はそうせず、「救いは、主にこそある」と告白する。試練の中にある者の救いはこのような救いである。

（聖書教育より）

「主に背き、救いにふさわしくないと思い込んでしまうような自分をも、主は見捨てに救ってくださるという決定的な体験をしたヨナは、『救いは、主にこそある』（2:10）と告白するに至りました。その信仰をもって、ヨナは陸地へと吐き出されます。」（聖書の学び～救いは、主にこそある）